

哲学、科学、形而上学

平 井 邦 男

1

現代における哲学の機能を考える時、我々は哲学と科学の関係を抜きに考察を進めることができない。二十世紀は科学の世紀といわれる。十九世紀後半から自然科学はめざましく進歩し、それによって我々の生活も著しく変化した。哲学はその中であってかつての栄光の座をすべり落ちたように見える。現代において哲学とは一体何であるのか？我々はこの問題を現代哲学の一つである分析哲学を手がかりに研究してみたい。それは主として哲学と科学と形而上学の三者の関係を明らかにすることになるであろう。

現代の所謂分析哲学は、哲学の営みを言語分析或いは言語の論理分析に限定しているように思われる。実際すべての知識は言語を媒介にして成立し、またそれは当然論理的整合性の保持を要求されている。そうである以上言語分析は哲学において欠かせない武器であろう。論理分析は勿論哲学の重要な一分野である。二十世紀初頭以来の記号論理学の発達は、言語の論理分析を容易にならしめ、現在までにすでに記号論理を駆使して様々の成果が得られている。我々は哲学における言語分析の威力を十分に認める者である。しかしながら他方、我々は哲学が言語分析のみに限定されるとは決して考えない。後に述べるように我々は哲学には他の要素が必要だと考える。何故に現代分析哲学は哲学を言語分析に限定するのか？何故に言語分析以外の営みを哲学から排除するのか？以下この点について考察してみよう。事柄は哲学の本性と深くかかわり合っていると思われる。

哲学は本来自己認識的な学である。というのは哲学の主要課題の一つが「哲学とは何か？」という問いそのものだからである。即ち、自己の探求すべき対象及び方法論の確立それ自体がすでに哲学の一部に含まれているのである。それ故、哲学者は自己の探求を始めるにあたって「哲

哲学、科学、形而上学

「学とは何であるか？」という問いに答えなければならない。そうしてまた、彼がこの問いに答え得た時には、彼は仕事の半ばを終えたのである。哲学上の様々な立場の違いは哲学のこの自己認識的性格から由来する。即ち、諸々の立場の相違は「哲学とは何か？」に対する答えの違いから発生するのである。

さて、現代の分析哲学は哲学を言語分析だと規定する。それは一体如何なる理由によってであるか？その哲学観を支える根拠は何であるか？哲学が自己認識的な学である限り、我々は以上の事柄を問題にしてもよからうと思う。そしてまたその吟味を通して我々は我々なりに「哲学とは何か？」という問いに答えなければならないと思う。以下、論点を哲学、科学、形而上学三者の相違と関連にしばって考察をすすめよう。

2

現代分析哲学の哲学観を理解するためにはヴィトゲンシュタインの奇妙なアフォーリズムに満ちた二冊の書物を読まなければならないだろう。とりわけ、ウィーン学団の所謂論理実証主義に決定的な影響を与えた彼の処女作「論理哲学論考」(Tractatus Logico-Philosophicus 1922)は見逃すことができない。彼はそこで述べている。

「すべての哲学は言語批判である。⁽¹⁾」

「哲学の目的は、思想の論理的な浄化にある。⁽²⁾」

「『哲学的な諸命題』が哲学の成果ではない。それらの諸命題の明確化に哲学の成果がある。⁽³⁾」

「哲学は、放置しておけば、いわば曖昧模糊のままである思想を明瞭にし、それに明確な輪郭をあたえる義務を負う。⁽⁴⁾」

「哲学は語りうるものを明晰に表現することによって、語りえぬものを示唆するにいたる。⁽⁵⁾」

「哲学の正しい方法とは本来、次のごときものであろう。語られうるもの以外にはなにも語らぬこと。ゆえに、自然科学の命題以外にも語らぬこと。ゆえに、哲学とのかかわりもまたぬものしか語らぬこと。⁽⁶⁾」

「語りえぬものについては、沈黙しなければならない。⁽⁷⁾」

論理実証主義の主張がこれらの断片の延長線上に発生することは見易いことである。

さて、「哲学の課題が言語分析である」というヴィトゲンシュタインが始め、論理実証主義を経て、現代分析哲学に至っている哲学観には強い一つの前提が存在していた。それは、科学と形而上学とを俊別し、そうした上で形而上学を無意味なものとして葬り去ろうとする意図である。ウィーン学団に集った人々には根強い反形而上学の気分が充満していたのである。分析哲学はこの反形而上学的衝動の産物といえよう。ここでの実証主義という名は即ち反形而上学と同義であった。そしてまた、実証主義という語は科学性とも同義であった。以上の事柄を明確に述べたのが世にいう「意味の検証可能性の理論」(verifiability theory of meaning)である。検証理論によると事態は次のようになる。

我々はあらゆる知識を命題、即ち文—記号の形で持つ。そして命題はどれ程複雑なものであっても、それを構成するより単純な要素命題に分解することができる。逆にいえば、複合命題は要素命題から構成される真理関数(truth function)と考えられる。さて、要素命題の中で最も単純なものをいま、原子命題(atomic proposition)と名付ける。するとすべての命題は原子命題の真理関数であることになる。ここで命題は次のように大別される。即ち、原子命題の真・偽にかかわらず常に真となる恒真命題(tautologies)、逆に常に偽となる矛盾命題(contradictions)そしてその両者のいずれにも属さぬ命題である。さて、問題なのは最後の種類の命題である。ここで「意味の検証可能性の理論」が適用されるのである。即ち最後の種類の命題には有意義な命題と無意味な命題の二種類が存在する。即ち、その命題の真・偽を検証する手段が原理的に与えられている命題、これは有意義な命題^⑧経験命題である。そして真・偽の検証手段を持たない命題、これは無意味な命題、否、命題とはいえないたわ言にすぎないものとされるのである。それはヴィトゲンシュタイン流に言えば「語り得ぬもの」に属する。形而上学はこうして検証手段を持たない文の集積として、無意味だとされるのである。初期の論理実証主義者は以上の見解を何の疑いもなく信じていた。たとえば、モーリツ・シュリックは単純明快に言っている「命題の意味とはその命題の検証の方法である」^⑧と。検証手段を持たない命題は意味のないたわ言なのである。形而上学は間違った命題ではない。A・J・エイヤーによるとそれは「字義上の意味を持ちうる為の条件を守らない文」^⑨なのである。ヴィトゲンシュタインは言っている。「哲学的なことがらについて書かれた命題や問いの多くは、誤りではない。ナンセンスなのだ。したがって、われわれはこの種の問いにおよそ答えるすべを知らず、ただそのナンセンスであることを立証できるにすぎぬ。哲学者のかかげる問いや命題の多くは、われわれが自分たちの言語の論理を理解していないことにもとづく」^⑩さてこのような「意味の検証可能性の理論」によって無意味だとされるのは単に形而上学ばかりではない。倫理的な価値評価を含む文章もまた、その真偽の検証方法を持たないが故に、感嘆文と同

じようにただ個人の情動を表現するにすぎないものとなる。ここから現代の代表的な倫理理論である情動説 (emotive theory) が出てくるのは当然であろう。

これらのことをもう一度要約してみよう。あらゆる文章は次のような三種類に分類できる。

- (1) 我々の経験とは無関係に真・偽を決定できる文。論理的命題 (恒真命題と矛盾命題)。
- (2) 経験によって真・偽が検証できる文。経験命題 (科学によって扱われる命題)。
- (3) 真・偽の検証手段を持たない無意味な文。情意文 (形而上学、倫理学等の文)。

科学は(1)と(2)の命題のみを扱い、(3)の文章は科学から排除しなければならない。

さて、論理実証主義者が以上のような有意味性の基準、或は意味の検証可能性の理論によって形而上学を科学から首尾よく排除しえたと思っただのはつかの間のことであった。この理論には思わぬ困難が存在していたのである。

3

まず第一に意味の検証理論を厳格に適用すると、検証理論をのべた文章そのものが無意味となる。即ち、その文章はその真・偽を決定しえない文なのである。一般に、事実と命題との関係を述べる認識論的命題はこうしてすべて無意味になる。それらはすべて検証手段を持たない文なのである。この困難を如何に回避すべきか？それは集合論における所謂ラッセルのパラドックスに似た困難である。周知のようにラッセルは、タイプ理論 (theory of types) によってこのパラドックスを解消しようとした。検証理論における困難も同様の発想法からタルスキの言語の階層理論へと発展していくのである。それによると我々の言語には様々な階層が存在する。この階層を無視するところから諸々の矛盾があらわれてくるのである。この階層を明確に区別しなければならぬ。まず、事実について述べる対象言語 (object language) があり、次にその対象言語について述べる高次の言語 || メタ言語 (meta-language) がある。さらにその上にメタ・メタ言語があるという風に、言語はそれぞれの次元において意味をもつのである。この言語の階層理論によって、意味の検証理論自体はメタ言語と解釈されて、有意味とされるのである。

さて、次に、意味の検証理論にはさらに大きな困難が存在する。それはこうである。科学の扱う命題は普通、個別命題ではなくて、全称命題

(universal proposition) である。この全称命題の真・偽は我々の感覚的経験では決して検証できないのである。何故ならば、検証の方法である我々の経験は、多少とも私的であり、個々の個別的対象しか検証できないからである。たとえば、「すべてのカラスは黒い」という命題の真・偽は「このカラスは黒い」という命題をいくらつき重ねても、それでは検証できない。即ち、我々がカラスの全体を把握しえないかぎり、「すべてのカラスは黒い」という命題の真・偽は決定できないのである。即ち全称命題の真理性は個別的経験によっては検証できないのである。ここで意味の検証理論は大きく後退しなければならなかったのである。論理実証主義者たちは、最初科学と形而上学を俊別し、形而上学を無意味なものとして葬り去ろうとして検証理論を提出したのであった。しかし、今度は逆にその事柄によって、科学もまた検証方法を持たない無意味な命題の集積となってしまったのである。

この困難を打解するためには、検証理論をゆるめなくてはならない。論理実証主義の指導的な哲学者、ルドルフ・カルナップは検証の語にかえて確証という語を用い、検証理論の修正を行った。彼は「検証が真理を有限確定的に定めることならば、我々はいかなる文も検証できない。我々にできるのは文の確からしさを順次強めてゆくことだけである。」¹¹⁾我々が、このカラスは黒い、あのカラスも黒いという風に次々と黒いカラスを見出してゆけば、それだけ一層、「すべてのカラスは黒い」という命題の確からしさ(Probability)を確認している(confirm)というのである。こうしてカルナップは確率的論理学へと意味論を発展させていくのである。

さて、このような意味理論の修正によって当初の目的であった科学と形而上学との俊別の問題はきわめて曖昧なものとなってしまったといわざるをえない。実証主義者たちはもはや「形而上学は無意味だ」とはいえない。何故ならば、そのようにいえば科学もまた無意味になるからである。検証理論によっては科学と形而上学を厳密に区別することができないのである。それにもかかわらず形而上学と科学をあくまで分離しようとするならば、それは主観的な「決心」(decision)の問題なのである。その人の世界に対する態度(attitude) 或は性格(character)の問題にすぎまい。理論的には科学と形而上学の区別ができないのである。これでは問題の解決にはならない。このことを鋭く指摘したのはカール・ポパーである。

カール・ポパーは彼自身述懐しているように、最初から科学と偽似科学（形而上学）の区画の問題に興味を示していた。彼が最初にとりくんだ哲学的問題はこの区画問題（the problem of demarcation）である。そして彼は、論理実証主義者とは別に、独自の方法でその区画問題に対する答えを見出した。それは「反証可能性の基準」（criterion of falsifiability）と呼ばれるものである。彼はいつている。「理論の科学性の基準は、その反証可能性（falsifiability）、反論可能性（refutability）、テスト可能性（testability）である。¹²」さて、このポパーの反証可能性の基準は検証理論或は確証理論にかえて考案されたものではない。それは、全然異った科学観の上に立脚したものである。

ベーコン以来、所謂古典的実証主義者たちは科学について次のような見解を持っていた。まず最初に、何らの先入見に乱されない純粹なる観察が存在する。様々な観察の結果、我々は多くの個別命題を手にするが、我々はそこから所謂「帰納的推論」によって、一般的な全称命題を導き出す。これが科学の命題である。次にこうして導き出された全称命題の正しさを実験によって確かめるのである、と。論理実証主義の検証理論や確証理論も以上のような見解を前提にしていたといえる。ところがポパーは上の見解を科学についての誤ったドグマだと断罪するのである。

まず第一に、科学は「純粹なる観察」によってはじまるのでは決していない。先入見を持たない純粹なる観察などというのは言葉の遊びである。我々はそのような観察など持ちえないし、また観察結果をいくら並べてもそこから一般法則などは決して出てこないであろう。科学の出发点は観察ではないのだ。科学は観察ではなく、問題の発見、問題の換起によって始まるのである。最初に我々は何かについての問題を心に抱かなければ、事は始まらない。そしてポパーによれば「これらの問題は、我々の知っているような世界を理解しようとする我々の企画において発生する」のである。

さて、第二に、科学の命題である全称命題は様々な個別命題から帰納的推論によって導き出されるのではない。仮説はどのような非合理的な方法で思いつかれてもかまわない。我々は問題状況から仮説の形成へと飛躍する。その際、仮説が如何にして形成されるかは論理的な事柄ではなく、心理的な事柄である。この過程は神秘のままであってもよい。事実、神秘のままである。それはいわばベルグソンの創造的直観によって行われるのであろう。科学理論にとってはその命題がどのような方法で思いつかれたかは問題ではない。問題なのはその理論が有効かどうか

である。

さて、第三に実験或は観察の役割りは、実証主義者のいうように、仮説の正しさを検証したり、確証したりという肯定的なものではない。逆にそれは否定的な性格を持つ。即ち、「理論のあらゆる真のテストは、それを反証する、もしくは反論する企てである。」¹⁴⁾この点は詳述しなければならぬ。

ポパーによると、我々の知識はプラトンの意味での真知(エピステーメ)ではない。むしろ我々の知識は単なる憶見(ドクサ)にすぎないものである。だからこそそのテストが必要なわけであるが、テストはその命題の正しさを証明したりはできない。ある仮説がテストにパスする時、我々にいえるのはせいぜい、その命題がいまのところ間違いではないということなのだ。そもそも我々が様々な実験を行うのはその仮説を反証しようとするからなのである。実験は仮説が真であることは検証できないが、その偽であることは明確にすることができる。「証明」は不可能であるが、「反証」は可能である。その理由は知識を構成する全称命題の論理的構造の中にある。即ち、実験によって得られる個別命題をいくらつみ重ねてもそこからは全称命題は論理的には導き出せないが、全称命題は一つの個別命題と矛盾するからである。(論理学のA—O、E—Iの矛盾を考えよ)。「このカラスは黒い」「あのカラスも黒い」という命題は「すべてのカラスは黒い」の真なることの証明にはならない。しかし、「黒くないカラスが一羽存在する」という命題によって「すべてのカラスは黒い」という命題は反証される。全称命題は一つの存在命題(existential proposition)によって反証されるのである。この実験の否定的性格の洞察によってポパーは科学理論の反証可能性の基準を構想したのである。

科学が経験的な学であり、そして経験が理論の否定性において決定的な意味をもつものだとするれば、科学は形式上、経験によって反証可能な形態で叙述されなければならない。これがポパーいうところの科学の反証可能性の基準なのである。

5

さて、我々は科学理論としては論理実証主義の主張よりカール・ポパーの主張の方が正当であると考えてるが、ポパーの反証可能性の基準にも問題がないわけではない。

まず第一に、ポパーのいう演繹的テストによっては仮説は実際問題として決定的に反証されないのである。ポパーは演繹的テストとして次のような事柄をあげている。(1) 仮説の内部の整合性の確認。(2) 仮説の経験性の確認。(3) 仮説の進歩性の確認。(4) 実験による批判。こうしたテストによって仮説と実験結果に矛盾が生じたでしょう。即ち、テストが仮説を反証したのである。しかし、その時でも我々は様々な方策によって仮説の延命をはかることができる。ポパーはこれを「コンヴェンションナリストの方策」(conventionalist stratagem)と呼んでいる。そしてコンヴェンションナリストの方策として次の四つをあげている。(1) 理論に補助仮説をもうけて、実験結果と矛盾しないように操作する。(2) 理論の中の概念の定義をし直して、実験結果とつじつまを合わせる。(3) 反証実験のやり方を批判し、実験の権威を否定する。(4) 反証を受け入れる理論家を非難、中傷し、その権威を否定する。以上四つである。

このコンヴェンションナリストの方策に対してどのように対処すべきか？ポパーは次のように述べている。「コンヴェンションナリズムを避ける唯一の道は、決心 (decision) 即ちその方法を適用しないという決心をすることによる。我々は我々の体系が脅かされている場合にも、如何なる種類のコンヴェンションナリストの方策によってもそれを救うことをしない、という決心をするのだ。」⁴⁵ポパーはコンヴェンションナリストの方策を理論上は正当なものと認めざるを得ない、という。或る仮説に補助仮説をもうけてその説を修正することは科学の中で普通に行われていることである。そこで、彼は問題を決心の問題にするのである。そして彼はこの決心を一人の科学者の問題ではなく科学者すべてが守るべき「方法的規則」(methodological rules)として提案する。即ち、科学者たるものは科学というゲームを行うにあたって、そのルールとして前記の決心を行うべきである。言い換えれば、科学者は反証可能性の基準を一つのコンヴェンション、一つの科学のルールとして認めるべきだということである。こうしてポパーの反証可能性の基準も、論理実証主義の検証理論や確証理論と同様、科学と形而上学の区画の問題を結局のところ「決心」の問題にしてしまったのである。

さて、区画問題が結局決心という主観的な問題におちつくのであれば、そもそも科学と形而上学、科学と偽似科学とを俊別しようとすることに如何なる意味が存するのかを逆に新ためて問い直さなければならぬだろう。論理実証主義者は形而上学に対する敵意から、またポパーは彼自身のべているようにフロイト、アドラー、マルクス等の理論に反対して、それぞれの区画基準を確立しようとした。しかし、検討の結果、区画は論理的には不可能なのである。区画の問題は結局は感情の問題なのである。初めに、俊別したいという欲望が存在しなければならなかった

のである。

私は前稿「精神分析と哲学」（大手前女子大学論集第8号）において、フロイトの精神分析学を哲学とのかかわりにおいて考察した。そしてデカルトのコギトから出発した近世的自我概念がフロイトの無意識の発見によって決定的に破壊された点にフロイトの理論の積極的な意義を見出していた。フロイトの理論にはまだ修正すべき点が多く、経験科学といい切れぬ部分をも多く含んでいる。それは事実である。しかし他方において、無意識の設定による自我概念の拡大、人間形成におけるエロスの要素の重視、幼年期の重視等々見逃せない部分をも多く含んでいることもまた事実である。フロイトの理論はこういってよければ「出来上りつつある科学」「生成途上にある科学」である。また、マルクスの理論は科学理論であると共に、単なる科学以上のものを含んでいると考えられる。どちらにしても、ポパーのようにこれら理論を偽似科学として科学から排除するのは問題であろう。反証可能性の基準は既存の科学、出来上ってしまった科学を擁護し、これから出来つつある科学、新しい形成途上の科学を無視することになりはしないか。論理実証主義者やポパーのように科学を規定すれば、所謂社会科学、人文科学のほとんどは科学とはいえないものとなる。というのは、人間或いは社会に関する現象はあまりにも複雑であるので、これらの分野ではいまだ彼らの科学の基準に合うような決定的な仮説は一つ打ち立てられていないからである。これらの科学はすべて「出来つつある科学」である。我々はこれを「決心」によって排除するわけにはいかないだろうと思う。

さて、次に我々は論理実証主義及びポパーの哲学観について一瞥してみよう。彼らによって哲学は如何なる学として認識されているのだろうか？それは彼らの科学観と結びついていることはいままでもない。

6

論理実証主義の思想はもともと科学と形而上学を俊別し、形而上学を無意味なものとして知的営為から排除しようというものであった。これはヴィトゲンシュタインの思想の影響である。ヴィトゲンシュタインにとっては、真正な哲学的問題などはこの世に存在しない。哲学的問題といわれるものは、誤った言語の使用法、言葉の意味の混乱に由来する。即ち、哲学的問題などはナンセンスなのである。ここから、哲学者は言語分析に従事すべきであるという現代分析哲学の哲学観が誕生する。カルナップなどの「哲学は、科学のロジカル・シンタックスをつくる活動

「である」¹⁶⁾という立場も同様の見地からなされたものである。実証主義者にとっては科学だけが有意な命題の集合なのだから、哲学者はこの科学の理論を形式化し、その形式の論理構造を明らかにすることが任務になる。このことをロジカル・シンタクスを作る活動を行うというのである。要するに、論理実証主義者にとっては哲学とは「言語の論理分析を行うこと」なのである。

以上のような哲学観にポパーは当然のことながら反対している。彼にいわすれば、科学は科学の問題を解き、哲学者は哲学の問題を解くべきである。「もしヴィトゲンシュタインの学説が真であるなら、その時には、誰も私の言う意味で哲学することはできなくなる。」¹⁷⁾ポパーにとって哲学することは、言語の形式化や論理分析を行うことではなく、哲学的問題を解くことである。哲学的問題とは何か？それはポパーに言わせると「哲学の外の切迫した問題に根差している。」¹⁸⁾そしてその哲学外の根が朽ちれば、哲学的問題は死滅する、という。ヴィトゲンシュタインの誤りはこの哲学外の問題を見落した所にある。哲学内部だけの問題についていえば、ヴィトゲンシュタインの指摘は概して正しい。それらは恐らくは言語使用の誤りから生れたにせよ、問題であろう。しかし、その外ににせよ、問題でない真正な哲学的問題がある、とポパーは主張するのだ。それは哲学の外、即ち諸科学の中にその根を持っている。その問題とは何か？彼はいつている。「私は、すべての思索する人々が関心をもつところの、少くとも一つの哲学的問題が存在する、と信じている。それは宇宙論の問題—世界の一部分としての我々自身と我々の知識を含めての世界を理解するという問題—である。」¹⁹⁾哲学とは簡単にいえば「宇宙論」或いは、「世界を理解すること」だというのである。また彼は続けてこうもいつている。「すべての科学は宇宙論である、というのが私の信念である。私が科学に対しても、哲学に対しても同様に関心を抱くのは、ひとえに、それらが宇宙論に対して貢献してきたからにはかならない。」²⁰⁾さて、ここでこの二つの引用文を比較すると、次のような疑問が浮んでくる。哲学は「宇宙論」であり、同時に「すべての科学が宇宙論」であれば、両者の違いはどこに存在するのか？また両者の関係はどのようなになっているのか？

科学の基準は先に述べたように「反証可能性」ということであった。そして哲学と科学とは異なる学なのだから、そこから哲学は「反証不可能な理論」ということになる。実際、ポパーは哲学を「反証不可能な学」と規定している。それでは、反証不可能な学である哲学と、反証可能性を持たなければならない科学とは、同じ「宇宙論」同じ「世界を理解する」という問題に対して、どのような関係にあるのだろうか？ポパーはここで、近代科学に対する古代ギリシアの自然哲学の役割りなどを考慮に入れ、哲学を科学の先駆的形態と見なす立場をとっているように思わ

れる。哲学者は科学者に先んじて、世界についての新しい問題を発見し、様々な形而上学的観念を發展させる。それらの諸理論は、いまだ反証可能な形で述べられていないが、科学とはいえないが、科学の進歩のためにはかかる先駆的な仕事が存在しなければならぬ。哲学或いは形而上学は科学のパイオニアだといふのである。彼はいつている。「……(略) 純粹に形而上学的な諸観念、それ故に哲学的な諸観念が宇宙論にとって非常に重要なものであったことは事実である。ターレスからアインシュタインまで、古代の原子論から物質に関するデカルトの思弁まで力に關するギルバート、ニュートン、ライプニッツ、ボスコヴィチらの思弁から電磁場についてのファラデーおよびアインシュタインの思弁に至るまで、形而上学的観念は科学に道を示してきたのである。」^(四) 科学のパイオニアとしての哲学者は世界のいたるところに問題を発見しなければならぬ。ギリシア人の「驚きの能力」、豊かな感受性を備えていなければならない、といふのである。このようにして哲学者によって提起された問題や理論は、漸次反証可能な形態に書き換えられることによつて科学へと移行する。ポパーの「哲学(形而上学を含む)と科学の關係は以上のようなものである。

ここで問題を元にもどそう。哲学及び形而上学と科学との關係が以上のようなものであるとすれば、ポパーが最初、科学と偽似科学とを俊別しようとしたのはどのような理由からであろうか。彼は、フロイト、アドラー、マルクスの理論を反証不可能な偽似科学だと断罪した。他方、同じく反証不可能な哲学を科学の先駆として位置付けている。フロイト、アドラー、マルクスの理論はポパーにとつて哲学の中に入るのであるか。そしてそれらの理論が科学の先駆的形態だと位置付けているのだろうか。我々は彼の書物からはそのような答は引き出せないことを知っている。例えば「歴史主義の貧困」の中ではフロイトやマルクスの理論を再度、別の角度から批判しているのである。ここに、我々はポパーの主観的な感情を見ることが出来る。

ポパーのフロイトの精神分析学、アドラーの個性心理学、マルクスの歴史理論に対する批判は、彼の個人的な反感から来ているのだ。反証可能な基準も彼の哲学観も理論的にはこれらの理論の断罪には役立つたないのである。

以上、我々は論理実証主義とカール・ポパーの哲学観を見てきたが、いずれにも問題のあることを指摘しえたと思う。次に、それでは、哲学とは何であるのか？そして科学とは？形而上学とは？という問題についての私なりの考えを述べることにしよう。

論理実証主義者にとっては哲学は言語分析である。また、ポパーにとっては哲学は科学の先駆としての宇宙論である。両者の主張は相異っているが、なお仔細に検討すれば論理実証主義者にもポパーにも共通する一つの前提が存在することがわかる。それは、哲学を含めてあらゆる学は、価値観から自由である、即ち価値の問題を含まない、という前提である。マックス・ウェーバの用語を用いれば、学の没価値性(Wertfreiheit)ということである。彼らの哲学観が彼らの科学観と共に、学から価値の問題を排除しようという意図から出ているのは見やすいことである。さて、問題はこの点である。

経験科学が所謂没価値性を持つことさえ、様々な議論が百出するであろう。いま百歩ゆずって経験科学の没価値性を認めたとしよう。しかしその時でさえ、哲学は科学とは異なる学である限り、我々は哲学から価値の問題を排除する必要はないと考える。むしろ我々が哲学に期待しているのは、科学以外の何か、科学以上の何かなのである。そして、その何かは世界観、人生観を含めた価値の問題であると考える。哲学は価値の問題を含むが故に科学とは異なるのである。また、価値の問題を扱うが故に哲学の学としてのレゾン・デートルもあるのだと思う。哲学とは、我々にいわすれば、経験的知識に統一性をもたらし、そうしてその知識と価値観とを結合する学、簡単にいえば、我々の生き方と知識とを結合させた学といえよう。その意味で哲学は「理論的及び実践的な学」といえる。

我々は曰く、何らかの信念に基づいて行動している。この信念は三つの要素によって構成されている。一つは論理的知識である。これによって我々は推論を行うことができる。他の一つは感覚的、経験的知識である。我々は生れてから経験した事柄を記憶して知識として持っているのである。カラスが黒いと知っているのもこの経験的知識による。最後に、価値観である。我々は経験した事柄に伴う快および不快の感覚も同時に記憶している。我々はカラスは黒いということと同時に、そのカラスに対する快或いは不快の感覚も保持しているのだ。こうした快・不快の感覚を基礎にして我々は様々な事物、事象についての価値観を持つ。

哲学は我々の生き方と結びついた学として、この信念の三要素によって構成されるべきだと私は考える。即ち、哲学は論理と経験知と価値観によって構成されると。この哲学観は私の独創ではない。それは古代ストア派の三分法に似ていなくはない。ストア派によると哲学はロギカ、

フィシカ、エテイカ、の三要素によって構成されるのである。

我々は日常生活においてはあるがままの生を直接的、即自的な形で生きている。我々が生涯の間中この「幸福な無反省的即自的生」の状態にとどまっていることができれば幸いであろう。しかし、言葉を持ち、記憶を持ち、思考する人間はこの状態にとどまっていることができない。即ち、人間はいわば「不幸なる意識」を持つ存在なのである。意識をもたない事物はあるがままにある。それは始めから終りまで即自的に存在する。また、ほとんどの生物もただ反射的に行動するだけである。しかし、人間は言葉を用いることによって意識を巨大に発達させた。それは進歩ではあったが、同時に人間は「意識を持つことの不幸」をも経験しなければならなくなったのである。そういうわけで、我々は「不幸なる意識」によって、幸福なる即自的生の状態にとどまることができない。そうして、我々のこの問題状況に陥入るのだ。不安、迷い、自信喪失、倦怠、無気力、自己疎外……といった何らかの問題をかかえ込んだ状況に陥入るのだ。人々が以上のような問題状況に陥入ったとき、そこから「私は一体何をすればよいのか？」「如何に生きればよいのか？」という規範的或いは倫理的、価値的、哲学的問いを発する。即ち、人は自己の行動原理、行為規範を模索するのである。哲学はこのような状況のときに、その規範的問いの答えとして答えられるものである。即ち、哲学は、一つの当為ソレン (Sollen) を示し、そしてそれに至る方法論を示すものとして存在するのだ。そうであってこそ、哲学は科学と異なる学として意味を持つのである。科学は世界を理解する。しかし、哲学は世界を変えようとするのである。ヴァイトゲンシュタインの「ハエにハエ取り壺から脱け出る道をさし示すこと」というのは以上の意味に解さなければならぬ。ヴァイトゲンシュタインの誤りは規範的、倫理的問いを形而上学的問いと解し、その問い自体を無意味なもの、言語使用の混乱から由来するにせの問題とした点にある。ここから彼の言語批判としての哲学観が生まれるのである。たしかにヴァイトゲンシュタインの説にも一理はある。問題状況というのは一種の病気の状態であろう。哲学者は「精神の医者」としてメスをふるわなければならぬまい。哲学とは「治療」である。ただ我々はその治療は、ヴァイトゲンシュタインが言うように、言語批判による問題そのものの解消だとは思わない。勿論、そのようなケースも多々あるであろう。しかし、我々は治療とは本質的には規範的問いに答えること、一つの行動原理を示すことであると考える。何らかの原因によってぐらついた信念を再度たてなおすことにあると思う。

先に述べたように、我々は日頃何らかの信念によって行動しているが、その信念は普通には親や教師やその他の周囲の人々から教えられたものである。その信念が現実の困難とぶつかってぐらつき、疑念になったとき我々は哲学的問いを発するのである。哲学はこの問いに対する可能

な試案を提起するのである。このことから次のことがひき出される。即ち、哲学は一つではありえない。一つの哲学が存在するのではなく、様々な哲学が存在するのである、と。

哲学は一つの行為規範を提起し、それに到達する方法論を提示する。それは哲学の三要素から言えば、一つの価値観を示し、経験知と論理によってその価値の獲得方法を確立するのである。まず第一に、価値観の選択が人により、時代により、場所によって異なるであろう。第二に、方法論を立てる経験的知識、論理的知識も社会的、歴史的に相対的なものである。以上の理由から、哲学説は時代により、地域により、また各個人によっても異なることがわかる。現に我々はギリシア以来現在にいたるまで様々な哲学説を持ち、現代においても様々な哲学説が乱立している。それは、異常な事柄ではなく、哲学の本性に根ざす現象なのである。我々はこれらの様々な哲学説の中から自己に合ったものを選ぶか、さもなければ独自に自己の哲学をうち立てればよいのである。

哲学は行為規範を示す点で宗教及び芸術と共通点をもつ。異なる点は哲学はあくまでも学として批判可能形態において述べられるという点である。宗教の与える規範は信仰の対象としてのドグマとして与えられる。それは批判することを許されない。しかし、哲学の場合は規範は一つの試案として提示されるのだ。即ち相互に批判することがむしろ奨励されるのである。哲学のこの批判可能性が哲学と宗教とを区別するのである。他方、芸術もまた行為規範を提示することがある。しかしそれは想像力の産物として表現される。それは実現可能という意味での現実性に制約されない。哲学はこの点において芸術と異なっている。哲学は学としての現実性を持たなければならない。そしてその現実性を経験知 \parallel 科学によって基礎づけなければならないのである。

我々は分析哲学者たちのように哲学を言語分析に限定しようとは思わない。逆に、哲学は論理、科学、価値観の三者を統一するものと考えて。その意味で哲学はメタ・サイエンスといえるであろう。哲学は価値を含む総合学である。その学性は批判可能性と実現可能という意味の現実性に現われる。こうして哲学は我々の行動の基盤を与えるのである。

科学と形而上学の区画の問題は我々からいわすればたいして意味のない問題である。それは超経験的説明原理に対する人々の態度の問題であろう。科学はあくまで経験的な学である。他方形而上学は超経験的な説明原理を用いる。しかし、両者は程度の差なのである。科学自体も何らかの経験を越えた説明原理、或は確信なしには成立しえない。多くの場合、科学と形而上学に対する好みの問題は宗教に対する好みの問題と相

即するであろう。

結論として次のようなことができるであろう。哲学とは何か？という問いに対する我々の答えは次のようなものである。哲学は科学と行
為を結合させる総合学である。その意味で哲学は「学の学」といえる。(1970.8.30)

〔註〕

- (1) Ludwig Wittgenste in, *Tactatus Logico-Philosophicus* 1922 4-0031
- (2) *ibid.* 4-112
- (3) *ibid.* 4-112
- (4) *ibid.* 4-112
- (5) *ibid.* 4-115
- (6) *ibid.* 6-53
- (7) *ibid.* 6-54
- (8) M. Schlick, *Meaning and Verification*, p. 148
- (9) A. J. Ayer, *Language, Truth and Logic*, 2nd edit, p. 35
- (10) *Tractatus*, 4-003
- (11) R. Carnap, *Testability and Meaning* (*Philosophy of Science*, vol. III, 1936, p. 402)
- (12) K. Popper, *Conjectures and Refutations*, p. 37
- (13) *ibid.* p. 155
- (14) *ibid.* p. 36
- (15) K. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, p. 82
- (16) R. Carnap, *Logische Syntax der Sprache*, 1934
- (17) K. Popper, *Conjectures and Refutations*, p. 68
- (18) *ibid.* p. 71~72
- (19) K. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, p. 15
- (20) *ibid.* p. 15
- (21) *ibid.* p. 19